

禁煙推進委員会だより

「たばこをめぐる“おもてなし”の変化」

山口大学医学部地域医療推進学教授 福田 吉治（禁煙推進委員会委員）

昭和のおもてなし？

最近、N市に行った時、少し時間が空いたので、髪を切ろうと見知らぬ床屋さんに入ってみました。そして、びっくり。待合席の前に、灰皿、数種類のタバコ、ライターの“喫煙セット”が置いてあるではありませんか。お客さんに自由に吸ってもらうためとのこと。もちろん、髪を切らずに店を出ました。同じ日、同市の中華料理屋に入ると、すべてのテーブルに灰皿が置いてありました。こういう状況はN市だけではありません。実際、山口市の理容店にも喫煙セットが置いてありましたが、山口県の多くの飲食店は禁煙ではありません。

昭和の時代、家にお客さんが来た時、お茶と一緒に、灰皿を出すのが常だったように思います。それが“おもてなし”だったのです。

昭和が終わって四半世紀、おもてなしは全く変わりました。能動喫煙はもちろん、受動喫煙の健康被害が明らかになり、健康増進法などにより公共的空間での受動喫煙防止が義務となり、世の中は禁煙に動き出しました。おもてなしは、「吸ってもらう」から「吸えない」に変わったのです。

責任は誰に？

では、先ほどの理容室や中華料理店に責任があるのでしょうか。おそらく彼らは、このおもてなしの変化を知らない、知らされていないのだと思います。私たち専門職は、ことあるごとにたばこの健康被害や受動喫煙防止の必要性を耳にしていますが、一般の方はそうでもありません。コンビニで色とりどりのたばこのパッケージを目にし、日々さまざまな喫煙プロモーションに曝露されます。普通に生活していたら、たばこ喫煙を推進する情報の方がはるかに多いのです。

私たち専門職も、そんな彼らに積極的に情報提供したり、自ら行動を起こしたりする機会は多くありません。これでは、昭和のおもてなしを残したいと必死になる抵抗勢力に勝てるはずはありま

せん。一般の方の意識を変えようとする努力が足りない私たちにこそ、その責任があるでしょう。

禁煙デーを機会に

おもてなしの変化を知らせる機会のひとつが5月31日の世界禁煙デーと6月6日までの禁煙週間です。WHOを中心とした禁煙キャンペーンが世界中で行われます。もちろん、日本各地、山口県内でもいくつかの行事が予定されています。

ただ、まだまだ禁煙デーの認知度は高くありませんし、内容的にも充実させる余地は多々あります。禁煙デーや禁煙週間のみならず、禁煙、受動喫煙防止、喫煙防止教育など、県医師会の皆さんの組織的あるいは個人的な活動が、たばこによる害のない社会への一番の原動力です。ぜひ、禁煙デーと禁煙週間のイベントへのご協力とご参加をお願いしたいと思います。

さて、2020年の東京オリンピックに向けて、東京都にも受動喫煙防止の条例をという声があるようです。世界中からのお客様をもてなすには無煙環境が必要というものです。たばこの煙にさらされる飲食店やたばこ臭い宿泊施設にリピートする人はとても少なくなっています。県民のためはもちろん、県外からのお客さんをもてなすためには「吸えない」が基本です。



理容室の待合席前の喫煙セット！？